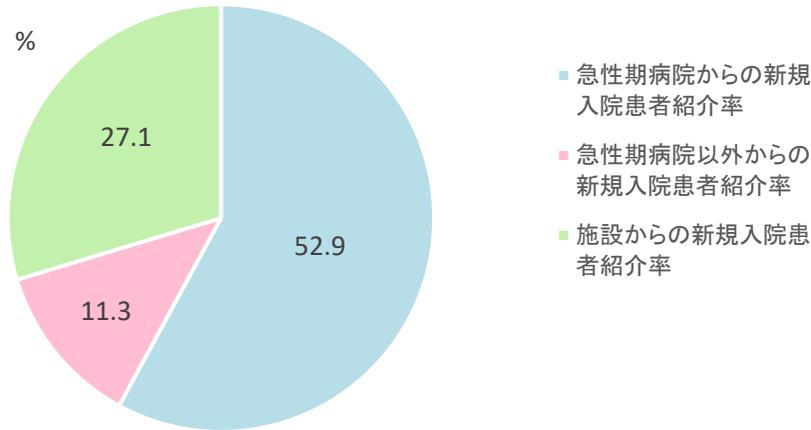
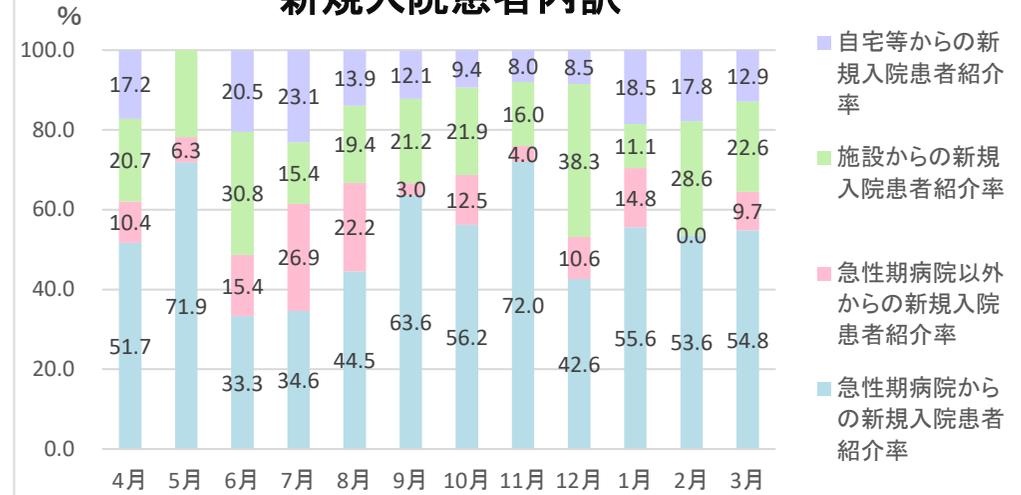


臨床指標 駒井病院（令和5年度）

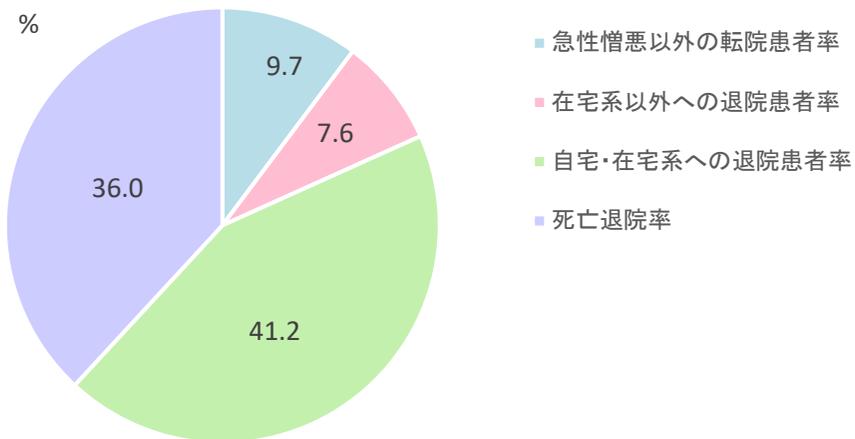
新規入院患者内訳



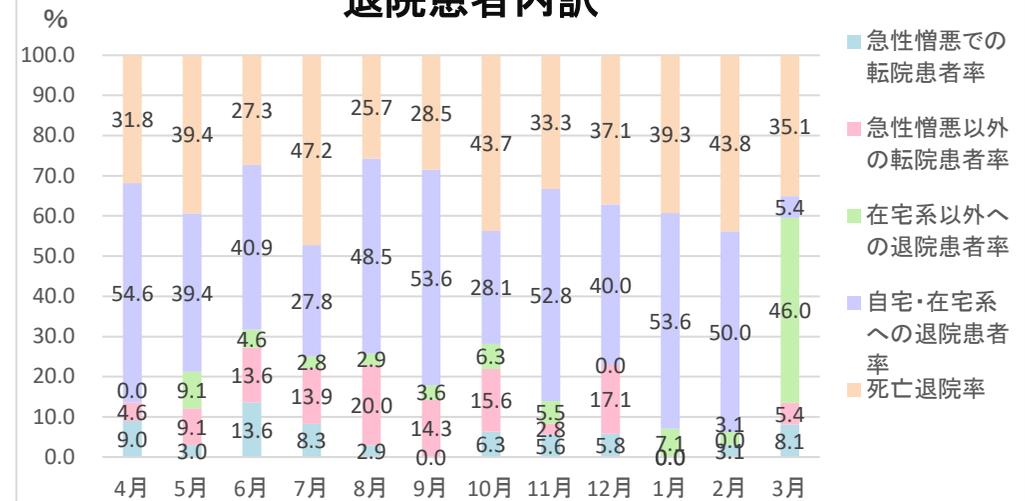
新規入院患者内訳



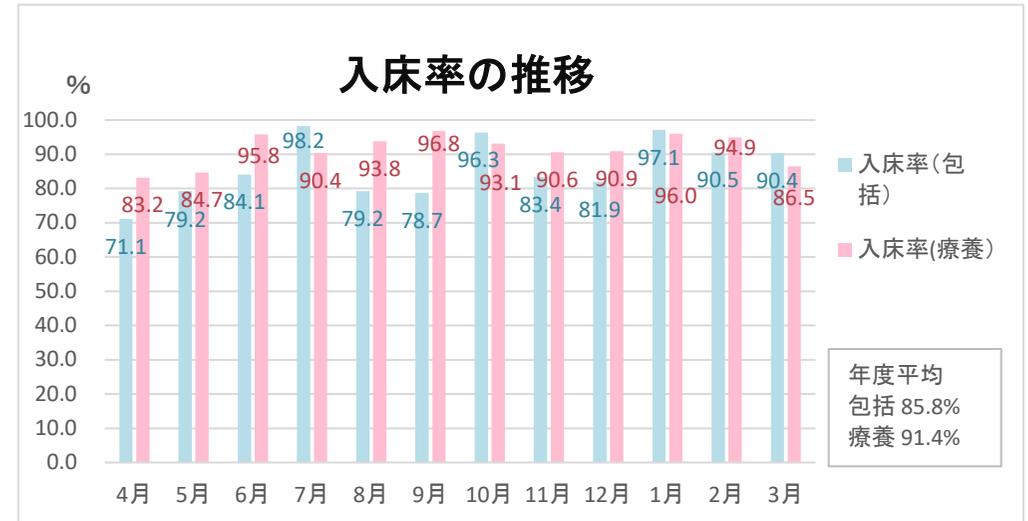
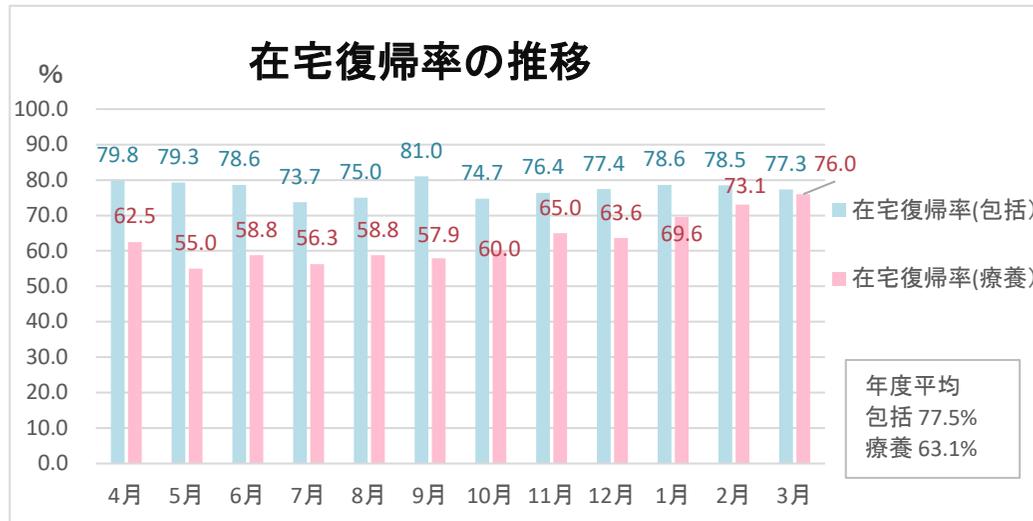
退院患者内訳



退院患者内訳



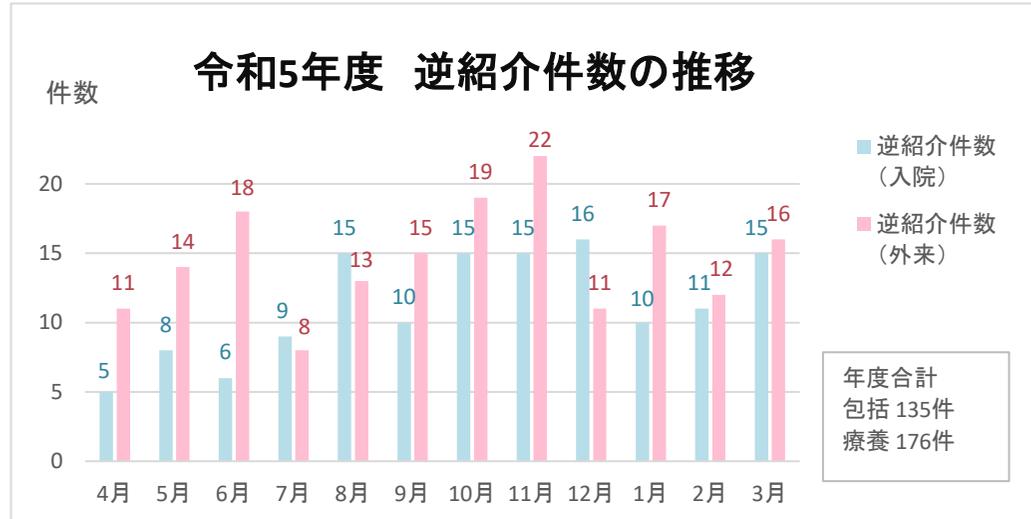
臨床指標 駒井病院（令和5年度）



評価

- ・新規入院については、急性期病院からの受入率は令和4年度38.6%から令和5年度52.9%と増えているが、自宅等からの入院受入は令和4年度31.0%から令和5年度13.8%と減少している。転院、退院に関しては、令和4年度と比べても大きく変わらず推移している。
- ・在宅復帰の平均は(包括)77.5%、(療養)63.1%と順調に基準をクリアしており、令和4年度と大きく変わらず維持できている。入床率は、(包括)が令和4年度79.2%から令和5年度85.8%となり大きく増加している。(療養)は令和4年度と変わらず90%以上を維持できている。

臨床指標 駒井病院（令和5年度）



評価

外来の逆紹介件数は令和4年度は140件だったが、令和5年度は176件と増加している。入院の逆紹介件数は、令和5年度135件となっていて、当院で入院加療が落ちつき病状が安定したら介護施設やかかりつけ医に紹介できている。

臨床指標 駒井病院（令和5年度）



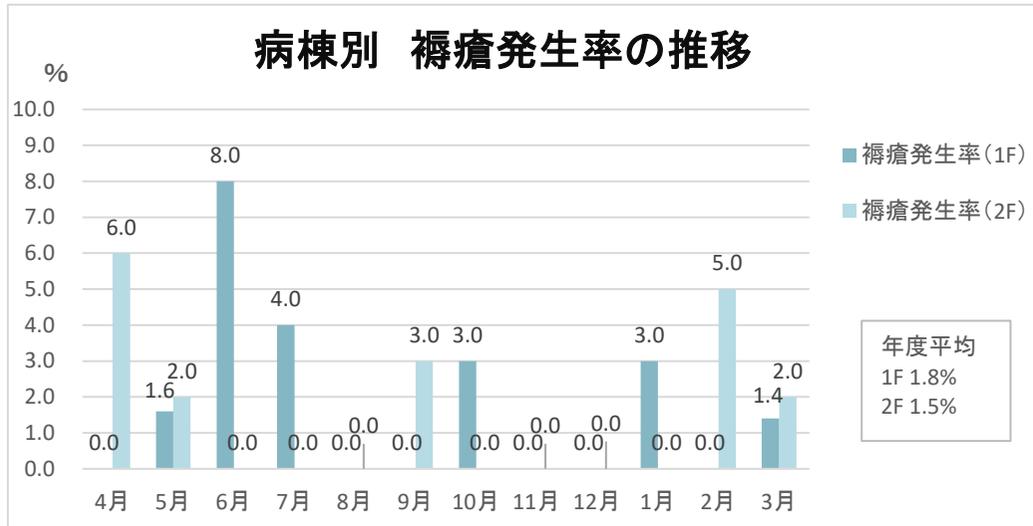
評価

当院は高齢者の方が多く、急な入院による環境の変化によるものや疾患・身体的な影響によるものを原因に、転倒や転落を起こしやすいと言える。

令和4年度では3.2%に対し、令和5年度では、4.4%と増加した。また、令和5年度では、重症率が0%→0.18%と増加した。転倒件数は増加しているが、転倒件数のうち、レベル1(転倒があってもケガがなかった)が8割を占めており、軽微なものとなっている。

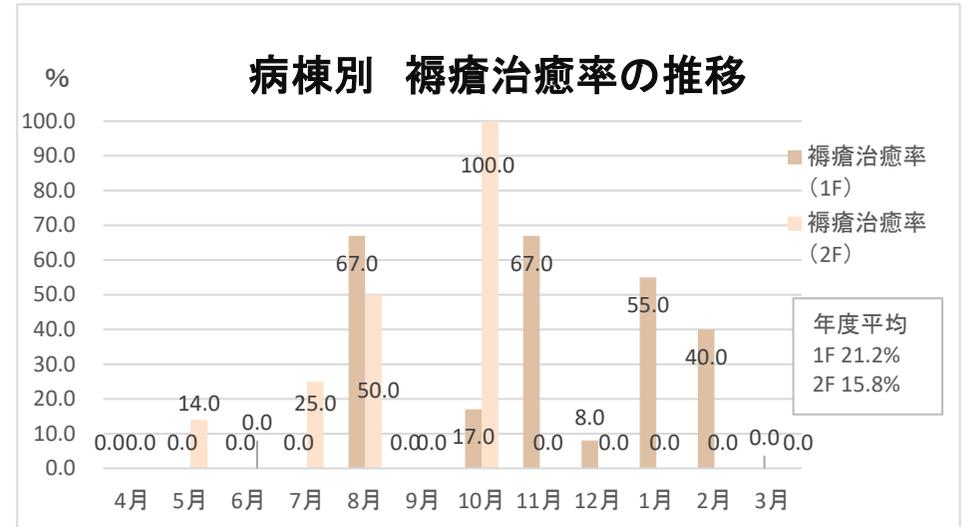
入院時に転倒リスク評価を行い、リスクが高い方には、対策を講じ、実践している。また、転倒や転落が万が一発生しても、大きなけがにつながらないように多職種で連携を取りながら、安全な療養環境を提供していく。

臨床指標 駒井病院（令和5年度）



評価

令和5年度より、対象をステージ I からステージ II に変更した。
病棟間での発生率の差異は見られなかった。



評価

令和4年度の治癒率は、病棟1階が16.3%、病棟2階が17.5%
であり、令和5年度はそれぞれ21.2%、15.8%であり、病棟1階
では上昇した。

臨床指標 駒井病院（令和5年度）

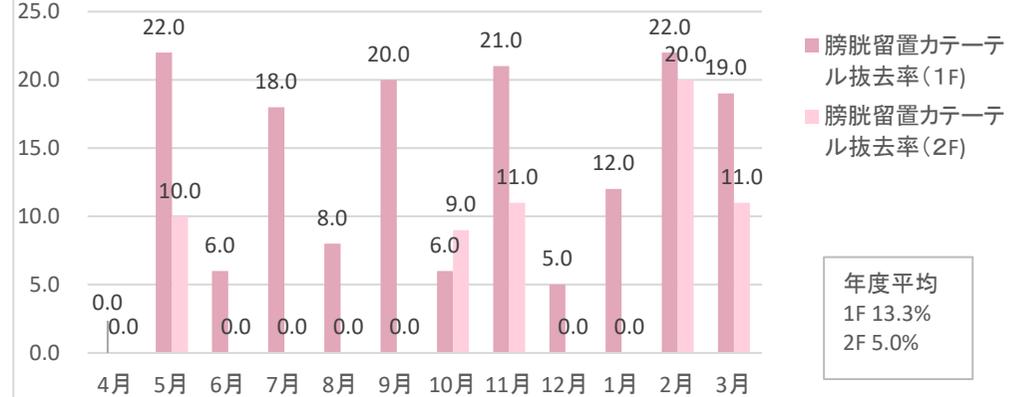
病棟別 身体拘束件数および拘束率の推移



評価

身体拘束件数は、令和4年度では、月4.8人→令和5年度では6人と増加、それに伴い、身体拘束率も、令和4年度は3.9%に対し、令和5年度は4.9%と増加した。
胃のチューブや点滴を抜いてしまう事で、治療に影響を及ぼしてしまう事がある為、ミトンを装着する事例があった。身体拘束後は、なるべく最小限になるように努め、1日でも早く解除となるよう、取り組んでいく。

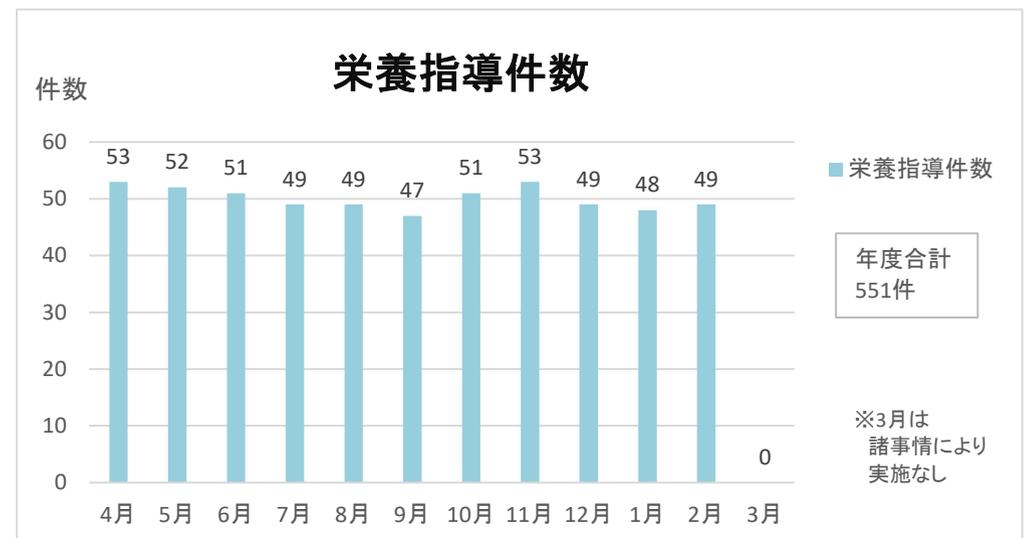
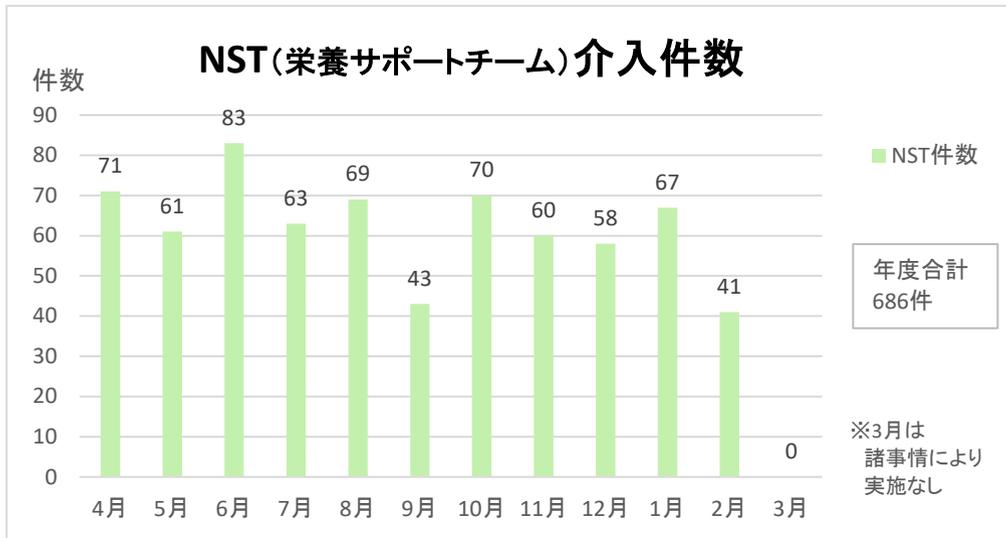
病棟別 膀胱留置カテーテル抜去率の推移



評価

令和5年度での抜去率は、病棟1階では13.3%、病棟2階では5.0%であった。
転院時から留置カテーテルが挿入されていることが多くみられるが、入院時からの早期から必要性をアセスメントし、抜去に向けて援助していく。

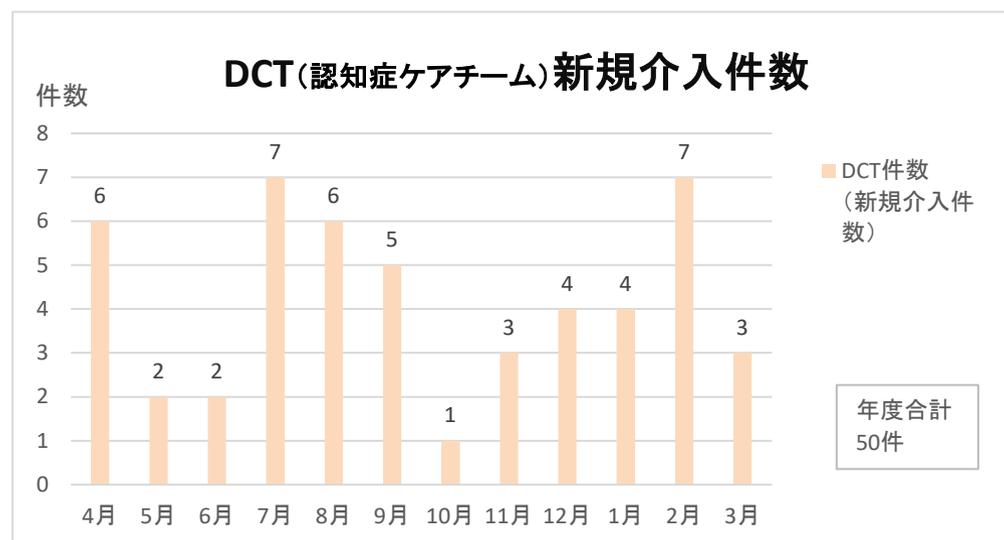
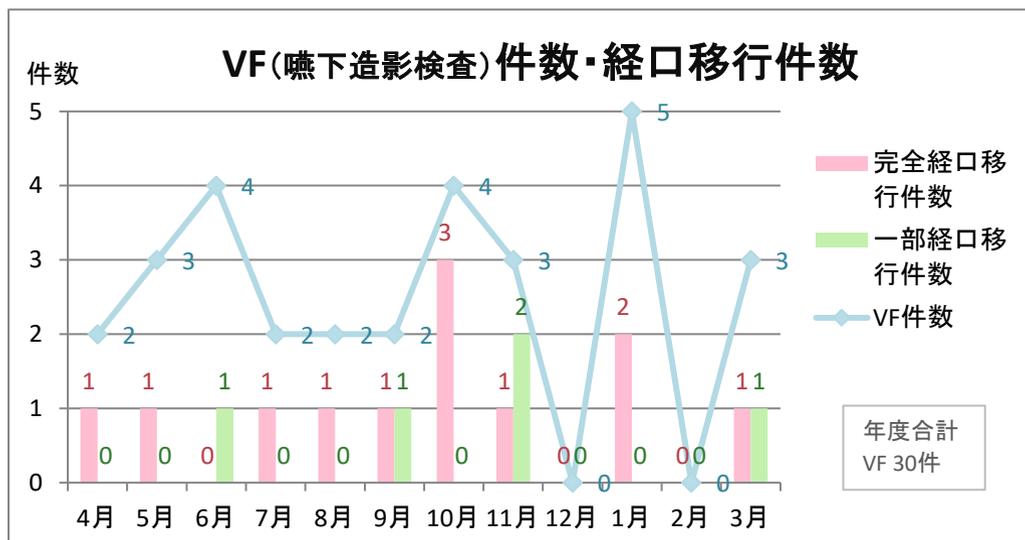
臨床指標 駒井病院（令和5年度）



評価

令和4年度のNST介入件数は742件であり、令和5年度は686件であった。令和4年度の栄養指導件数は643件であり令和5年度は551件であった。NST介入件数、栄養指導件数共に減少している。栄養指導は外来透析患者が多数を占めているため、外来数が減少すると指導数も減少となる。また、NST介入については、新規入院患者の減少や患者の栄養管理方法により影響を受けたものと思われる。

臨床指標 駒井病院（令和5年度）



評価

令和4年度までは嚥下造影検査の件数は年間60件台で推移していたが、昨年度より減少に転じ本年度は30件で推移している。これまでは潜在的に嚥下障害を抱えている患者が多く、検査・訓練の対象となる頻度が高かった。コロナ禍を経て、嚥下機能は「ほぼ問題なし」、「訓練をするレベルではない」と変遷してきておりその影響が全体的な数値の減少につながっていると思われる。

評価

DCT(認知症ケアチーム)介入の新規介入件数は、令和4年度は月平均3.4件だったのに対し、令和5年度は月平均4.2件と増加した。チーム介入の対象となる入院時に評価する認知症高齢者の日常生活自立度判定Ⅲ以上の方では、昨年度より8名減ってはいるが、カテーテル管理、転倒転落防止、認知症の症状の緩和等、介入依頼も多岐に渡ったためと思われる。今後も安心して治療が受けられるよう支援していく。